

TZ ほんの窓

第 10 号 (2006.12.1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

伊東忠太～芸術としての建築、オリジナリティのある建築～

一橋大学の学内を歩きながら、ふと兼松講堂や図書館の前で足をとめて上を見上げたことがあるだろうか。あるいは図書館の前の池に注ぐ水の吐き出し口に目をとめたことがあるだろうか。中国ともヨーロッパとも、はっきりどこの生き物とも言えない不気味であり、それでいてどこか愛らしい怪獣がそこかしこに隠れているのを見たことがある方が少なくないのではないだろうか。それらの怪獣たちの生みの親が今回 TZ で取り上げる「伊東忠太」である。兼松講堂の設計者でもある伊東忠太の全体像から彼を有名にした「法隆寺建築論」を経て、彼の設計した様々な建築物に今回は焦点をあててみたいと思う。



一橋大学兼松講堂

伊東忠太と建築



伊東忠太(1867-1954)

伊東忠太¹は、明治から昭和時代にかけて活躍した建築家である。一橋大学においては、兼松講堂の設計者として、また構内に多数いる怪獣たちの生みの親として有名だが、彼の功績はそれだけには留まらない。彼は、日本における建築史研究者の最初であり、また法隆寺の建築物としての価値の発見者としても日本建築史に名を刻んでいる。伊東忠太が活躍した明治 30 年代は、日本の建築史に関しては、全く研究がなされていなかった。そんな時代に、忠太は法隆寺建築の研究をまとめ、各時代の建築の研究に進み、日本建築史の体系を初めて樹立したのである。また、中国、インド、トルコなどを調査し、東洋建築史の体系も樹立している。『日

本の建築と思想 - 伊東忠太小論』、『建築巨人 伊東忠太』(読売新聞社、1993 年)【2800:1440】、『伊東忠太を知っていますか』(王国社、2003 年)【2800:1031】などは、伊東忠太の全体像を知るのに最適な本である。

伊東忠太の功績をもう一つ挙げるとすれば、当時「造家学会」と呼ばれていた「建築学会」を現在の名称に改称する動きの中心人物だったことがあげられる。「造家学会」を「建築学会」と改称すべきである、ということを述べた論文「アーキテクチュールの本義を論じてその訳字を選定し我が造家学会の改名を望む」(『建築雑誌』1894/6)は『伊東忠太建築文献』に納められている。この論文も例外ではないが、忠太は「建築は芸術である」という主張をその建築研究の根本に据えていた。その主張がよく表現されている本として、『建築の学と藝』(三笠書房、1942 年)【Sch:146】という本がある。ここで、忠太は芸術とはオリジナリティであり、建築が「芸術的創意を欠ける模倣に終わるのは洵



【2800:1440】

¹ 伊東忠太の写真は『松岡正剛の千夜千冊』<http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0730.html>より(参照: 2006.12.1)

に遺憾の極みである」と述べ、ここに我々は彼の考え方を垣間見ることができる。

法隆寺建築論

さて、その伊東忠太を世間に知らしめたのは、法隆寺が世界最古の木造建築であることを発見したという事実である。その「発見」は、「法隆寺建築論」として明治31年(1898)『東京帝国大学紀要』工科一号に掲載された(またこの論文は、『伊東忠太建築文献1 日本建築の研究(上)』(龍吟社、1937年)

【Miura/E:77】にも収録されている)この中で、忠太は法隆寺の中門の柱が「エンタシス」(円柱の柱身の胴部につけられたふくらみのこと)に似ていることを指摘し、法隆寺の形がユーラシア大陸を伝わって、ギリシアから到来したものではないか、という仮説を立てる。このことについては『法隆寺への精神史』が詳しく取り上げている。この説が正しいのか否かは読んでいただくとして、忠太は、この説を立証すべく、三年を



法隆寺中門

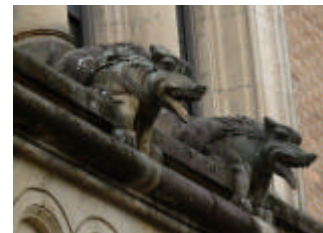


費やし、ユーラシア大陸横断の旅に出た。そしてその成果として「建築進化論」を得た。それは、どの建築物も元をたどると木造に行きつき、石や煉瓦に変わってからも木造時代の名残を残している、という説で、忠太はこれを木造から石造への建築物の進化、ということで建築進化論と名付けた。建築物の木造時代の名残について、『古典建築の失われた意味』では現存の建築物の形態がどのような由来によるものなのかを知らせてくれる。

伊東忠太の建築と怪獣趣味

最後に、伊東忠太の建築作品を紹介したい。裏面に忠太の建築のうち、都内に現存するものをまと

めた。行って見ていただければわかるが、忠太の作品にはユニークなものが多い。そのユニークさをさらに際立たせているのが多くの作品に登場している怪獣たちの存在だ。忠太の主義として、建築は芸術であり、芸術はオリジナリティである、ということは先に述べたが、忠太によれば化け物もまた民族の差異に応じて異なる物で、国・地域・時代に特有なものであるのだ。そのように考えた伊東忠太が残した怪獣のいる建築作品について知るには、



一橋大学附属図書館時計台棟の怪獣



【5200:66】

『伊東忠太動物園』(筑摩書房、1995年)【5200:66】がある。それぞれの建築作品に関する解説とともに、忠太が残した怪獣に関する文章等もまとめて掲載されている。また『建築探偵東奔西走』(朝日新聞社、1988年)【5200:11】では一橋大学が取り上げられ、キャンパスの怪獣たちが写真付きで紹介されている。この本を片手に構内を怪獣探しに出るのもおもしろいかもしれない。

伊東忠太関連資料

伊東忠太『伊東忠太建築文献』(全6巻、龍吟社、1937年)【Miura/E:77】

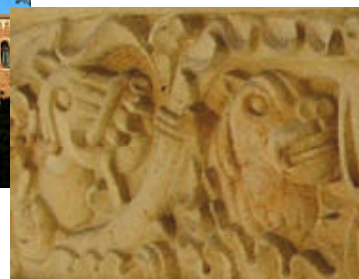
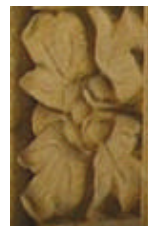
伊東忠太『法隆寺』(創元社、1940年)【Pc:110】

「世界を股にかけた"元祖建築探偵"伊東忠太」(『芸術新潮』、48(12)、pp.50-55、1997年12月)【ZP:14】

「伊東忠太 建築を魑魅魍魎で飾った男」(『太陽』、33(10)、pp.58-59、1995年9月)【ZA:185】

伊東忠太 建築作品所在マップ 東京都²

一橋大学兼松講堂



築地本願寺



大倉集古館



湯島聖堂 大成殿



東大正門



遊就館



東京都慰霊堂



復興記念館

² 各建築物に振られている番号については、次ページの施工年、所在地を参照するためのものである。

東京都（竣工年）

東京大学正門（1911）文京区本郷 7-3-1
中牟田家墓（1913）港区南青山 2 丁目 青山霊園
青山胤通墓灯籠（1921）台東区谷中 7-5-24 谷中霊園
平田東助墓（1926）文京区大塚 5-40-1 護国寺
平田東助像台座（1927）町田市相原町 中央協同組合学園
一橋大学兼松講堂（1927）国立市中 2-1
大倉集古館（1927）港区虎ノ門 2-10-43
東京都慰霊堂（旧・震災記念堂）（1930）墨田区横綱 2-3-25
大倉喜八郎墓（1930）文京区大塚 5-40-1 護国寺
復興記念館（1931）墨田区横綱 2-3-25
遊就館（1931）千代田区九段北 3-1
築地本願寺（1934）中央区築地 3-15-1
湯島聖堂 大成殿（1935）文京区湯島 1-4-25
藤田正輔墓（1936）府中市多磨町 4 多磨霊園
鮎川義介家墓（1938）府中市多磨町 4 多磨霊園
入澤達吉墓（1939）台東区谷中 7-5-24 谷中霊園

画像引用先

大倉集古館

「米沢市上杉博物館」HP より(<http://www.denkoku-no-mori.yonezawa.yamagata.jp/top.htm>)

震災記念堂, 復興記念館, 築地本願寺

「建築マップ」より(<http://www.archi-map.net>)

遊就館

「靖国神社遊就館」HP より(<http://www.yasukuni.jp/~yusyukan/>)

湯島聖堂大成殿

「私立PDD図書館」より(<http://www.cnet-ta.ne.jp/p/pdplib/default.htm>)